The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	祖父母世代による子育て参加の可能性の検討
Author(s)	田渕, 恵; 中原, 純
Citation	生老病死の行動科学. 2006, 11, p. 53-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8249
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

原著論文

祖父母世代による子育て参加の可能性の検討

Participation in nurturing by grandparental generation

（大阪大学人間科学部人間科学科）　田　渕　　恵
（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程）　中　原　　純

Abstract

The purpose of this study was to reveal the contents of agreement and disagreement on nurturing between parental and grandparental generation in order to encourage people in grandparental generation to participate in nurturing. For this purpose, the realities of nurturing in the two generations, the needs of grandparental generation for nurturing and the commitment of grandparents toward nurturing were investigated. The participants consisted of 293 parents and 216 grandparents. Results showed that grandparents raised their children with the help of their neighborhood. On the other hand, parents received larger support through the members of their nurturing circles. The both groups of generation basically agreed with grandparental participation in nurturing. With the specific contents of grandparental participation, however, there were some points of agreement and disagreement between the generations.

Key word : grandparental generation, participation in nurturing, needs, commitment

Ⅰ．序　論

21世紀は、少子高齢化が現在よりも更に進み、高齢社会の時代状況が一般化するといわれる（国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成14年１月推計）」）。かつてはマイナスイメージと共に社会から分離される傾向にあった高齢者だが、平均寿命の延びに伴い、今や心身ともに元気な高齢者が増加している。高齢者自身が自らを「高齢者」と認識しない傾向も見られ、ボランティア活動など積極的に社会参加を求める姿が目立つようになった（前田，2003）。内閣府による「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」（内閣府，2003）によれば、対象高齢者の54.8％が地域社会でのグループ活動や学習活動など、何からの活動に参加している。今後団塊の世代が退職を迎え、積極的に社会参加・社会貢献を求める高齢者はますます増加するものと思われる。

社会の中で高齢者が存在感を高める一方で、少子化による社会状況の変化、家族形態やコミュニティの変化は、とりわけ次世代を担う子ども達の生活や発達に大きなインパクトを与えている（嵯峨座，2001）。かつての伝統的な世代間関係が根底から切り崩され、子どもは家庭内、あるいは地域での高齢者との交流の場を失い、社会的存在としての人間性を育まれる機会を失っている（堀，2001）。また子どもを育てる親世代においても、核家族化や地域のつながりの希薄化により、子育ての孤立化が問題となっている（武田，2002）。特に、家族・地域一体の子育てから「母親一人の育児」への変遷により、育児のつらさを訴える母親が増加している（大日向，2005；中野，2005）。こうした子育てにおける問題を見直し、子どもの育ちに高齢者が積極的にかかわることのできる社会を作るため、近年提唱されているのが、祖父母（シニア）

世代による子育て参加である。

高齢者が子育ての側面から社会参加を行う際、具体的には2つのかかわり方が考えられる。1つは、現在子育てを行っている親世代に対する支援、という形でのかかわりである。飯田・菅井（2000）や大日向・荘厳（2005）は、子育て支援として親世代に対する介入や援助の重要性を説いている。親世代の子育てによるストレスを軽減する目的で、いわば補助的な役割として高齢者がかかわることが可能である。もう1つは、高齢者が子ども自身の育ちにかかわることである。清水（1996, 1998, 2006）は、核家族化の進行による3世代同居の減少から、血縁関係の枠を超えて「世代間交流」の視点祖父母世代が孫世代と直接関わることの意義を唱えている。かつては家庭や地域の中で成り立っていた高齢者と子どもとのかかわりを取り戻すことにより、高齢化社会で生きてゆく子ども達の高齢者に対する認識を深め、子どもたち自身も社会的存在としての成長を遂げることができる。

祖父母世代のパワーを子育てに活かそうとする動きは各地で見られる（清水，2006）。シニアボランティアの一環として、子育て支援の取り組みを行っている団体は多い（清水，2006）。しかし、祖父母世代が子育てに参加する際、親世代との間で問題が起こることも少なくない。とりわけ、子育ての主体である母親が、祖父母世代の子育て参加により悩むケースが見られる。2004年に20代から40代の母親70名を対象に行われた「子育てに関する世代間のズレについて」の調査では、祖父母世代の子育て参加の問題として、54％の人が「意見を押し付けられる」ことを挙げている。また、29％の人が祖父母世代の人とは「育児方針が違う」と感じている。多世代による子育てでは、子育てに関する意識や考え方の、世代間の相違点を認め合い、支えあうための新たなルールが必要となる（大日向，2005）。

そこで本調査では、多世代での子育てを実現するにあたり、まず各世代による「子育て」の実態を把握する。次いで、高齢者が子育てに参加することについて、祖父母世代そして現在子育てを行っている親世代はどのように考えているのかを明らかにする。親世代が求める子育て支援と、祖父母世代が参加したい支援の側面の一致点・不一致点を明確にし、祖父母世代が子育てに参加する具体的な可能性について検討する。高齢者が自身の孫、あるいは地域での子どもの育ちに積極的にかかわっていくことのできる社会を目指すことが、本調査のねらいである。近年は女性の家族の個人化（神谷，2004）により、夫が育児に参加することの重要性が強調されている。しかし、内閣府「国民生活白書」（内閣府，2000）による「育児期にある夫婦の育児、家事および仕事時間の国際比較」によれば、日本社会は男性の育児休業取得率がわずか0.33％に過ぎず、母親に対する育児負担が他国に比べて明らかに大きい。従って、祖父母世代の子育て参加を検討する際にも、特に現時点で育児を行っている母親の意見に焦点を当てる必要がある。よって、本調査では女性を対象に行うこととする。

Ⅱ．方　法

1．調査対象

奈良県在住の、子育て中の親世代738名と祖父母世代838名を対象に質問紙を配布した。対象者は、県内の「健やか奈良支援財団」実施事業参加者、「女性センター」実施事業参加者、民生児童委員、「子育て家庭サポートセンター」事業参加者、保育園児の保護者などであった。その結果、親世代297名分（回収率　40.24％）、祖父母世代391名分（回収率　46.66％）の質問紙が回収された。本調査では女性を対象に行うため、親世代（母親）293名、祖父母世代（祖

母）216名を分析対象とした。平均年齢は、親世代34.77歳（SD=5.97）、祖父母世代64.58歳（SD=7.75）であった。

2．調査手続き

本調査は、平成17年度世代間交流子育て支援事業（長寿開発センター助成金）の一環として行われた。平成17年11月上旬に質問紙を郵送配布し、平成18年１月上旬までに回収した。

3．調査内容

3-1．基本属性

対象者自身の基本属性に関する質問として、性別・年齢・居住市町村・世帯構成・就労・ボランティア活動の参加状況について回答を求めた。また、親世代の対象者については、子育て中であることが前提となっているため、祖父母世代についてのみ、子どもの有無を尋ねた。

3-2．子育ての実態把握

対象者の子育ての実態を把握するため、対象者自身が実際に行った、あるいは現在行っている子育てに関して、回答を求めた。祖父母世代において子どもがいない対象者は、回答不要とした。

3-2-1．子育ての知識・情報源

子育て中、子育ての知識や情報を誰から得ていたかについて、回答を求めた。具体的質問項目としては、「1.配偶者」「2.実父母」「3.義父母」「4.保育所・託児所・幼稚園等の保育士」「5.近所の人、親戚」「6.子育て仲間（サークル）」「7.電話相談」「8.ベビーシッター」「9.ファミリーサポートセンター等の公的システム」「10.育児書などの本」「11.保健師による指導」「12.医師・看護師」「13.誰からも得なかった」「14.その他」の14項目を挙げ、複数回答可能とした。

3-2-2．子育てで困ったときに助けてくれた人・モノ

子育て時に困ったとき、助けてくれた人あるいはモノについて、回答を求めた。具体的質問項目としては、「2-2.子育ての知識・情報」と同様の14項目を挙げ、複数回答可能とした。

3-3．祖父母世代の子育て参加についての質問

3-3-1．親世代のニーズと祖父母世代の参加意欲

子育てにおいて、親世代は祖父母世代にどの程度参加してほしいと考えているか、あるいは祖父母世代は子育てにどの程度参加したいと考えているかについて、回答を求めた。親世代は、祖父母世代に「1.積極的に参加してほしい」、「2.できる限り参加してほしい」、「3.少し参加してほしい」、「4.参加してほしくない」の4件法により回答を求めた。祖父母世代は、「1.積極的に参加したい」、「2.できる限り参加したい」、「3.少し参加したい」、「4.参加したくない」の４件法により回答を求めた。

3-3-2．祖父母世代の子育て支援内容について

祖父母世代に参加してほしいと考える親世代には、どのような側面で参加してほしいのか、参加したいと考える祖父母世代には、どのような側面で参加したいのかについて、回答を求めた。アンケート調査「子育てに関する世代間のズレについて」（中国新聞情報文化センター，2004）によれば、祖父母世代からの支援で親世代が助かったこととして、アドバイスや経験談、悩みの相談など、「子育ての先輩としての支援」、仕事中預かってくれるなどの、「親の代わりとしての支援」、おんぶ紐を譲ってくれるなど、「物質的・経済的支援」を挙げている。また直

井（2000）は、祖父母世代の文化を孫世代に伝えることを、親世代が願っていることを指摘している。しかし、これらは全て親世代のニーズであり、こうした側面について祖父母世代の支援意欲がどの程度であるか、両世代でどのようなズレが生じるのかについての調査はない。従って、ここでは具体的質問項目として、「1. 子育ての仕方についてのアドバイス」「2. 子どもを預かって一緒に遊ぶこと」「3. 子育てに必要なモノ（おんぶひも、ベビーカーなど）の支援」「4. 祖父母世代文化の、子どもへの伝達」「5. 子育てについての悩み相談」「6. 子育てに関する昔の人の知恵」「7. 経済的な支援」の７項目を設定し、親世代では「1. まったく受けたくない」から「5. 大変受けたい」の５件法で、祖父母世代では「1. まったく行いたくない」から「5. 大変行いたい」の５件法で回答を求めた。

Ⅲ. 結　果

1. 対象者の基本属性

親世代において、世帯構成は、「２世代の世帯（親と未婚の子ども）」が203名（69.8%）、「実親と同居の3世代世帯」が19名（6.5%）、「義親と同居の3世代世帯」が53名（18.2%）、「その他」が16名（5.5%）であった。就労については、「専業主婦」が210名（71.9%）、「フルタイム」が17名（5.8%）、「パートタイム・アルバイト」が39名（13.4%）、「自営業」が11名（3.8%）、「無職」が11名（3.8%）、「その他」が４名（1.4%）であった。ボランティアについては、「関心がなく、参加したことがない」が49名（17.0%）、「関心はあるが参加したことはない」が150名（52.1%）、「１度か２度参加したことがある」が47名（16.3%）、「不定期だが何度も参加した」が21名（7.3%）、「定期的に参加している」が19名（6.6%）、「その他」が２名（0.7%）であった。

祖父母世代において、世帯構成は、「１人世帯」が28名（13.1%）、「夫婦２人世帯」が98名（45.8%）、「２世代の世帯」が44名（20.6%）、「実娘と同居の３世代世帯」が13名（6.1%）、「義娘と同居の３世代世帯」７名（3.3%）、「その他」が24名（11.2%）であった。就労については、「専業主婦」が105名（49.1%）、「フルタイム」が15名(7.0%)、「パートタイム・アルバイト」が22名（10.3%）、「自営業」が８名（3.7%）、「無職」が58名（27.1%）、「その他」が６名（2.8%）であった。ボランティアについては、「関心がなく、参加したことがない」が11名（5.2%）、「関心はあるが参加したことはない」が64名（30.3%）、「１度か２度参加したことがある」が33名（15.6%）、「不定期だが何度も参加した」が44名（20.9%）、「定期的に参加している」が56名（26.5%）、「その他」が３名（1.4%）であった。子どもの有無については、実子がいる人が206名（96.7%）、いない人が７名（3.3%）であった。

Table 1 に対象者親世代の基本属性を、Table 2 に対象者祖父母世代の基本属性を示す。

2. 子育ての実態把握

2-1. 子育てに関する知識・情報源

親世代と祖父母世代で、子育てに関する知識・情報源について違いが存在するかを調べるため、親世代（n=293）と祖父母世代（n=216）の２群に分けてカイ二乗検定を行った。その結果、配偶者（$\chi^2(2)=19.379$, $p<.00$）、実父母（$\chi^2(2)=12.528$, $p<.01$）、近所の知人（$\chi^2(2)=13.504$, $p<.01$）、子育て仲間（$\chi^2(2)=112.199$, $p<.00$）、保健師（$\chi^2(2)=11.198$, $p<.01$）において、２群間に有意な差が見られた。実父母、子育て仲間、保健師においては、親世代の

方が祖父母世代よりも子育ての知識・情報を得たと回答している人の割合が多い。対して、配偶者及び近所の知人においては、祖父母世代の方が回答者の割合が高い（Figure 1）。

Table1　対象者の基本属性(親世代 n=293)

	項目	人数	%
世帯構成	2世代世帯	203	69.8
	3世代(実親同居)	19	6.5
	3世代(義親同居)	53	18.2
	その他	16	5.5
就労	専業主婦	210	71.9
	フルタイム	17	5.8
	パート・アルバイト	39	13.4
	自営業	11	3.8
	無職	11	3.8
	その他	4	1.4
ボランティア	参加・関心なし	49	17.0
	参加なし・関心あり	150	52.1
	1度か2度参加あり	47	16.3
	不定期に何度も参加	21	7.3
	定期的に参加	19	6.6
	その他	2	0.7

Table2　対象者の基本属性(祖父母世代 n=216)

	項目	人数	%
世帯構成	1人世帯	28	13.1
	夫婦2人世帯	98	45.8
	2世代世帯	44	20.6
	3世代(実娘同居)	13	6.1
	3世代(義娘同居)	7	3.3
	その他	24	11.2
就労	専業主婦	105	49.1
	フルタイム	15	7.0
	パート・アルバイト	22	10.3
	自営業	8	3.7
	無職	58	27.1
	その他	6	2.8
ボランティア	参加・関心なし	11	5.2
	参加なし・関心あり	64	30.3
	1度か2度参加あり	33	15.6
	不定期に何度も参加	44	20.9
	定期的に参加	56	26.5
	その他	3	1.4
子どもの有無	あり	206	96.7
	なし	7	3.3

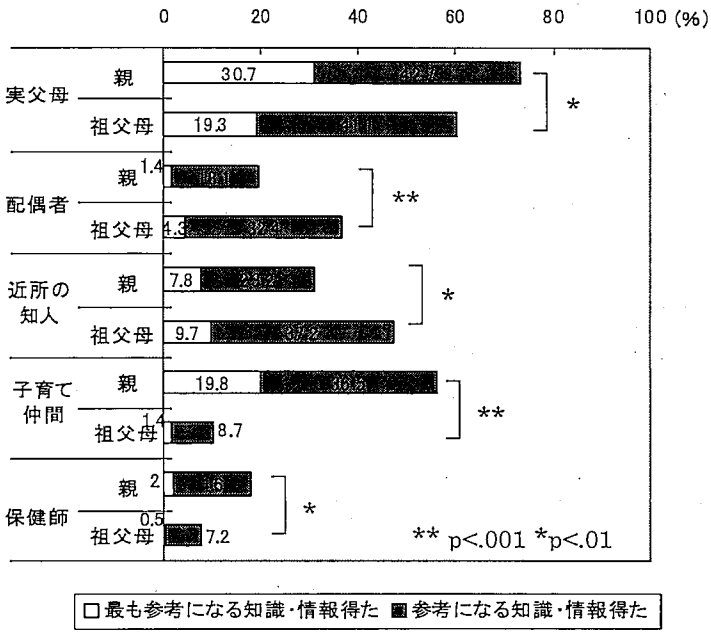

Figure 1　子育ての知識・情報源

2-2. 子育てで困ったときに助けてくれた人・モノ

親世代と祖父母世代で、育児で困ったとき助けてくれた人あるいはモノについて有意な違いが存在するかを調べるため、親世代（n=293）と祖父母世代（n=216）の２群に分けてカイ二乗検定を行った。その結果、配偶者（$\chi^2(2)=17.002$, $p<.00$）、実父母（$\chi^2(2)=39.093$, $p<.00$）、義父母（$\chi^2(2)=17.691$, $p<.00$）、近所の知人（$\chi^2(2)=49.824$, $p<.00$）、子育て仲間（$\chi^2(2)=37.233$, $p<.00$）、医師・看護師（$\chi^2(2)=6.925$, $p<.05$）において、２群間に有意な差が見られた。配偶者、実父母、義父母、子育て仲間においては、親世代の方が祖父母世代よりも、育児で困ったときに助けられたと回答している人の割合が多い。対して、近所の知人及び医師・看護師においては、祖父母世代の方が回答者の割合が多い（Figure2）。

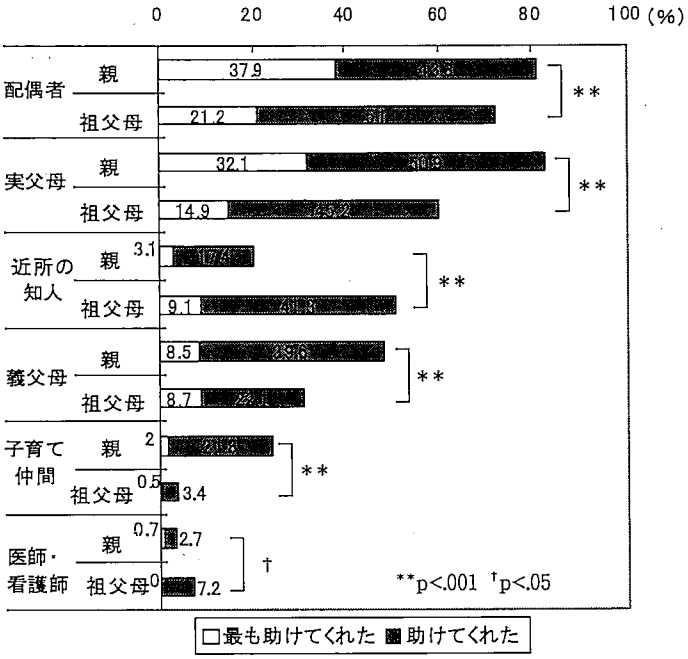

Figure 2　育児で困ったとき助けてくれた人（モノ）

３．祖父母世代の子育て参加について

3-1. 親世代のニーズと祖父母世代の参加意欲

祖父母世代の子育て参加について、親世代のニーズと祖父母世代の参加意欲を調べたところ、親世代ではほとんどの人が参加に肯定的であった。また、祖父母世代においても、85％以上の人が参加に肯定的であった。結果を Figure 3 に示す。

3-2. 親世代の具体的ニーズと祖父母世代の子育て支援内容

それぞれの世代において、どのような側面での支援ニーズ・支援意欲が高いかを検討するため、祖父母世代が子育てに参加する際の具体的な支援内容について、親世代のニーズと祖父母世代の意欲を調べた。

結果を Figure 4 に示す。「祖父母世代の文化の伝達」や「子育てにおける知恵の伝達」といっ

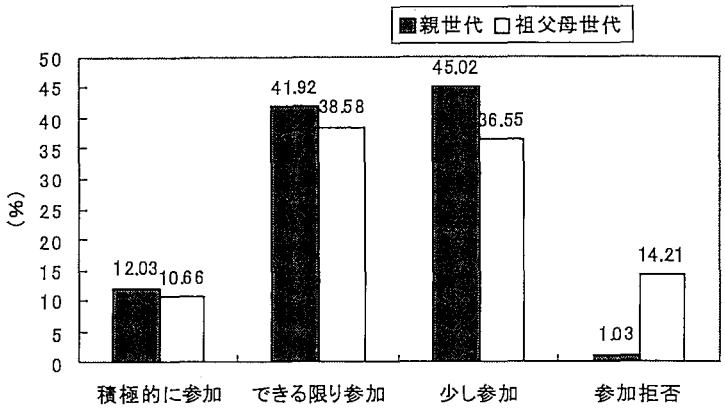

Figure 3　親世代のニーズと祖父母世代の参加意欲

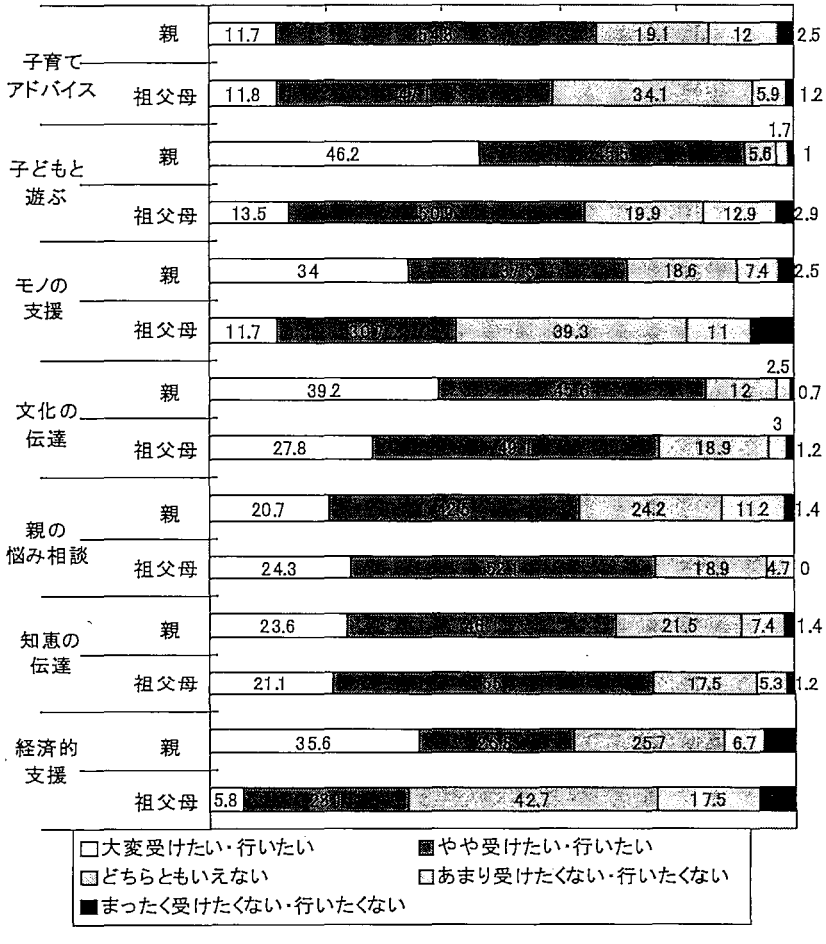

Figure 4　子育て支援内容

た、祖父母世代の経験による知識の伝達側面については、親世代のニーズも高く、祖父母世代の参加意欲も高い。「子育てに必要なモノ（ベビーカーなど）の支援」や「経済的支援」といった物質的支援の側面では、親世代のニーズの高さに比べて、祖父母世代の参加意欲が低い。

Ⅳ．考察

1．子育ての実態の把握

本調査では、子育ての主体である母親を対象に、子育ての実態を把握する目的で、「子育ての知識・情報源」及び「育児で困ったとき助けてくれた人（モノ）」について調査した。実父母や配偶者など、家庭内の家族に主として支援を求めているところが大きいことは両世代でも共通していたが、その中でも世代による特徴が見られた。子育てにおける知識や情報を得る際、祖父母世代は親世代と比較して、配偶者や近所の知人に頼る傾向にあった。また祖父母世代では、育児で困ったときも近所の知人が比較的大きな助けとなっている。武田（2002）は、今日の子育ての困難さの原因の一つとして、地域コミュニティの崩壊を挙げている。祖父母世代が子育てを行っていた時代には、地域が一体となって子どもを見守るシステムが整備されていたため、近所の子育て経験者より多くの情報を得ていたものと考えられる。しかし、今日では地域における人間関係の希薄化により、地域社会の大人が地域の子どもの育ちに積極的に関わろうとしなくなったことが、調査からうかがえる。2005年度「保育白書」（全国保育団体連絡会保育研究所，2005）では、こうした子どもの育ちをめぐる環境の変化が、基本的な生活習慣や態度、忍耐力の欠如など、子どもの育ちに変化をもたらしていると指摘している。祖父母世代が子育て支援を行う際には、こうした子育ての実態の変化を認識する必要があるだろう。また親世代では、祖父母世代ほど配偶者から知識や情報を得ていない。しかし、同時に両世代において配偶者は育児で困ったときの大きな助けとなっていることから、配偶者が子育てに関与しなくなったと考えるよりは、性別役割分業体制の確立と不況の進行により、父親の日常的な育児への関わりが困難になった（大日向，2005）と考える方が妥当であろう。

地域コミュニティの崩壊とそれに伴う地域の子育てネットワークの消滅により、代わって重要な役割を果たすようになったのが、サークル活動などの子育て仲間である（飯田，2000）。飯田（2000）は、親たちの孤立と欲求不満の感情からの脱出の手助けとして、「子育て仲間のたまり場」の重要性を挙げている。本調査でも、かつての子育てに比べ、現在の子育てでは子育て仲間が重要な役割を担っていることが示唆される。こうした「子育て仲間のたまり場」に、子育て経験者としての祖父母世代がボランティアの活動等を通して参加する可能性と重要性も指摘されている（飯田，2000；武田2000）。

2．祖父母世代の子育て参加について

現在子育てを行っている親世代においては、ほとんどが祖父母世代の子育て参加に肯定的であった。祖父母世代においても、参加に否定的である人の割合が親世代よりも多いものの、対象者の85％以上の人が参加に肯定的であった。しかし、親世代が祖父母世代に対し全ての面でのかかわりを求めるのではなく、両世代のニーズと意欲が合致した側面での支援を考えるべきであろう。

支援の具体的な内容については、世代間で共通点と差異が認められる。直井（2000）によれば、親世代は文化の伝達といった側面で特に祖父母世代の支援を期待している。祖父母世代に

おいても、単に親の代役としての支援ではなく、自分たちならではのかかわりを求めている。本調査においても、「文化の伝達」や「知恵の伝達」といった支援内容では、両世代共にニーズ・意欲が高いことが示された。平成17年度版「高齢社会白書」によれば、祖父母世代が子どもたちに手作りおもちゃなどを伝える活動が、各地で行われている。このように、次世代の文化の担い手である子どもたちに対する、文化の伝承といった側面での祖父母世代の参加が期待される。

対して、親世代のニーズと祖父母世代の参加意欲が一致しない側面も本調査で明らかになった。「経済的支援」や「モノの支援」といった物質的支援の面では、親世代のニーズが一方的に高い結果となった。特に「経済的支援」の側面では、祖父母世代で「行いたい」と回答した人は33.9％であり、意欲的であるとは言いがたい。子育てにおける物質的・経済的な問題は、例えば平成16年度「京都市子育て支援に関する市民ニーズ調査報告」などでも指摘されている。子育てにおける経済面での不安は、支援内容を考える上で今後も課題となるだろう。しかし、祖父母世代の参加意欲が決して高くない、こうした側面での親世代のニーズを、祖父母世代のみに一方的に求めることは難しいだろう。祖父母世代の参加意欲が低い側面に関しては、国や地方自治体の支援制度の充実化により、親世代のニーズに応えていく必要があると考える。

Ⅴ．課題と展望

本調査では子育ての実態の変遷や、多世代での子育てについての両世代の意見を明らかにすることを試みた。しかし、本調査で明らかになったことはほんの一部であり、祖父母世代の子育て参加推進による多世代での子育てを実現するためには、その他様々な両世代の意識のずれを把握する必要がある。とりわけ、社会の変化に伴う子ども観（河枝，1998）の変遷や、いわゆる「三歳児神話」（大日向，1988, 2002）に代表される子育て観の変化を考慮しなければならない。意識的あるいは無意識的に抱いている子育てへの認識を明らかにし、両世代の違いを互いに理解した上で、共に子どもを育んでいくための道を模索すべきであると考える。

引用文献

飯田進・菅井正彦　2000　親の相談が示唆しているもの　子育て支援は親支援ーその理念と方法ー　大揚社

大日向雅美　1988　母性意識の世代差について　母性の研究　川島書店

大日向雅美　2002　母性愛神話とのたたかい　草土文化

大日向雅美　2005　第４章　子育ての変遷と今日の子育て困難　大日向雅美・荘厳舜哉編　子育ての環境学　実践子育て学講座３　大修館書店　Pp.92-112.

神谷哲司・菊池武剋　2004　育児期家族への移行にともなう夫婦の親役割の変化　家族心理学研究，18(1)，29-42

河原和枝　1998　子ども観の近代　中央公論社

国立社会保障・人口問題研究所　2002　日本の将来推計人口（平成14年１月推計）

嵯峨座晴夫　2001　少子高齢化の人口動態　嵯峨座晴夫編　少子高齢社会と子どもたち　児童・生徒の高齢化問題に関する意識調査を中心に　中央法規　Pp.2-13.

清水美知子　1996　祖父母と孫のかかわりに関する研究ー「孫育て」をめぐる祖父と祖母のライフスタイルー　長寿社会研究所家庭問題研究所年報，1，67-80.

清水美知子　1998　母親からみた「祖父母ー孫」コミュニケーションの実態ー祖父母の<孫育て>をめぐってー　関西女学院短期大学研究紀要，12，75-87.
清水美知子　2006　シニア世代による子育て支援の実践ー加古川市「にこにこオープンルーム」を事例としてー　関西国際大学研究紀要，7，115-123.
荘厳舜哉　2005　第１章　文化の中の子育て　大日向雅美・荘厳舜哉編　子育ての環境学　実践子育て学講座3　大修館書店　Pp.3-18.
武田信子　2002　「私であること」と子育て環境　社会で子どもを育てるー子育て支援都市トロントの発想ー　平凡社新書
中央教育審議会　2005　今後の幼児教育のあり方　全国保育団体連絡会保育研究所　保育白書2005　全国保育団体連絡会保育研究所　Pp.111-121.
中国新聞情報文化センター　2004　子育てに関する世代間のズレについて　アンケート調査
内閣府　2000　「育児期にある夫婦の育児、家事および仕事時間の国際比較」　国民生活白書
内閣府　2003　高齢者の地域社会への参加に関する意識調査
内閣府　2004　平成16年度高齢化の状況及び高齢社会対策の実施状況　高齢者による子育て支援への取り組み　平成17年度版高齢社会白書
直井道子　2000　子育て支援・子育て情報をめぐって　家意識と祖母の育児・子育て情報と母親　目黒依子・矢澤澄子編　少子化時代のジェンダーと母親意識　新曜社，Pp.29-110.
中野洋恵　2005　ジェンダーと子育て①　子どもを育てるのは女性　大日向雅美・荘厳舜哉編　子育ての環境学　実践子育て学講座３　大修館書店　Pp.176-177.
堀勝洋　2001　世代間関係の変化　嵯峨座晴夫編　少子高齢社会と子どもたち　児童・生徒の高齢化問題に関する意識調査を中心に　中央法規 Pp.24-31.
前田大作　2003　active aging をめざしてー社会参加・相互扶助の可能性と進め方を考えー　老年精神医学雑誌，14，847-852.